

〔論 文〕

若き新井白石とその人物像

～血気盛んな若者？ ストイックな武士至上主義者？ 詩の達人？～

Maurizio Campana

はじめに

新井白石(1657～1725)は儒学者、政治家、言語学者、歴史学者、地理学者、詩人といった多様な顔を持った人物であり、そのいずれもが魅力的で、研究に値するものである。歴史を見渡しても、多分野に於いて、才能を開花させた天才は他にも存在するが、白石ほど多才な人物は稀有である。

筆者は白石の思想営為の中で外国人、取り分けイタリア人宣教師シドティ Sidoti (1668～1714)¹⁾との出会いを極めて大きなターニングポイントとして認識した。この偉人同士の奇会について既に述べたのでここでは省略するが、鎖国下で偶然に実現したこの出会いは、幕末までの文化的な側面に於いて西洋と日本が対面した極めて貴重なケースであり、西洋学や言語学に対する考えをドラマティックに推進することに大いに貢献した²⁾。

一方、白石は単なる朱子学者に留まらず、父親譲りの古武士的な一面を持ち、政敵に「鬼」と称されるほど強烈な個性を放った。シドティをはじめとする外国人との出会い以前の白石について論じることが、1つの課題である。

以下、本論に於いては、新井白石の誕生から甲府藩主の綱豊(後の第6代将軍家宣)に仕官するまでの時代を検討し、白石の人間形成と学問の展開について明らかにする。

I 父母と生い立ち

1. 父新井正済と母千代

白石の父、正済(1600～1682)は1女4男の

末子であり、両親が早死にしたこともあって、養子に出される。少年正済は物心がつくと養子に出された事を悟る。そのきっかけとなったのは、遊び仲間の侮辱発言である。正済は自分の養父が嘗て父の部下だった事を知り、その事を深く恥じ、僧侶から1貫文を借りて、13歳で養家を飛び出して江戸に向かう。如何にも正済が最も重要視した「男子の侮りをうくるは恥辱也」³⁾というモットーに正直な行動である。『折たく柴の記』によれば、江戸へ向かう途中で、2人の親切な飛脚に出会い、彼らのお陰で、江戸で身を寄せる事が出来たのである。

養家を抜け出して18年が経過し、1631年(寛永8)、正済は上総国(千葉県)久留里の藩主、土屋利直(1607～1675)⁴⁾の目に留まり、31歳でようやく徒歩侍として雇われることになる。正済は次第に頭角を現し、やがて江戸在勤の目付役となった。

正済の風貌について『折たく柴の記』では「我物覚えしよりは、髪に黒きすじはすくなかりき。面は方(ケタ)におはしまして、額上高く起り、眼大きく、髭多く、たけは短じかくおはせしかど、すべて骨ふとく、たくましく見え給ひたりき」⁵⁾と記されている。正済はその風貌にしても、性格にしても古武士的風格を強調して描かれている場面が多い。その幾つかの例を挙げてみると、先ず日常生活では「天性喜怒の色あらはれ見えたまはず。笑ひ給ふにも、声高くわらはせし給ひし事は覚えず」⁶⁾と喜怒哀楽を表さなかった。人を叱る場面でも乱暴な言い方を決してしなかった。また「もののたまふ事、いかにもことばすくなくして、たちみかろがるしからず。驚き給ひ、さはぎ給ひ、事に堪かね

給ひしなどいふ事は見し事あらず⁷⁾とのことである。教育関係の記述が多い『折たく柴の記』の上巻では父正済を中心に描かれている。白石の人間形成期では父親の存在は最も重要だったので、その記述の多さは当然である。

正済は土屋家に仕えた後も、妻を娶らない。そのような頑固な独身主義者は40代後半の時に、やっと15歳年下の女性、大名の家に侍女として仕えた経験のある女性千代(1615～1678)と結婚することになる。この時代は幕府の大奥だけでなく、大名家の奥向にも多数の女性が召抱えられ奉仕していた。その独特な空間では、雑事以外に、暇に任せて学問芸能を嗜むような風習があり、才能のある女性なら高レベルな教養を身に付ける事が可能であった。白石の母親千代は、その典型的な例である。

我母にておはせし人は、ものよくかき給ひしのみにあらず、歌の道をもつたへ習ひ給ひて、代々の集、または物語の類など、我あねいもうとによみををしへ給ひ、囲碁象碁なども、堪能におはして、これらの事をも我にをしへ給ひたりき⁸⁾。

『古今和歌集』やその他の勅撰集、『伊勢物語』・『源氏物語』等の物語類を読み教え囲碁等を教わった白石及びその姉妹にとっては、まさに母は家庭教師のような存在であった。白石が漢詩界の巨星となり、美しい和文の散文を残せたのも教養の高い母に恵まれたからである。上田万年が指摘するように、白石は父から剛毅卓犖の性格を、母からは学問の才能を受け継いだのである⁹⁾。

正済と千代の高年齢にもかかわらず、この夫婦は沢山の子宝に恵まれるが女の子ばかりであった。やがて第四子として、勘解由(白石)が生まれる。正済はすでに57歳、母の千代も42歳の高齢で、やっと新井家の嫡男はこの世に生まれてきたのである。

2. 新井白石の誕生と少年期の修業

白石が生まれた1657年(明暦3)の正月、江戸には明暦の大火が発生し、町の大部分を焼却してしまう。土屋の江戸屋敷も全焼し、利直は外孫の陸奥泉藩主内藤政親(1645～1696)の神田柳原の屋敷に逃れ、邸内に仮屋を建てた。2月10日、白石はその仮屋の中で生まれる。

有名な逸話だが、白石の肖像画には友人深見玄岱(1649～1722)¹⁰⁾の賛が加えられ、その中に「眉間の火の字」とある通り、白石の眉の間には火の字を思わせる皺があったようだ¹¹⁾。宮崎道生は、この点にも明暦の大火と妙な繋がりを感じるという¹²⁾。最も政敵に「鬼」と呼ばせた「烈火」の如く激しい性格と明暦の大火の間には無論繋がり存在する筈はないが、なぜか何らかの不思議な縁を感じてしまうのは筆者だけではないだろう。

白石は土屋利直と、特にその母から溺愛された。利直は離さずに勘解由(3歳の時から)を常に傍に置き、明暦の大火にちなんで「火の児」と呼んでいたのである。「火の児」は直ぐに稀な才能を発揮し、4、5歳の時に初めての大掛かりな書物に触れる。大人に混じって『太平記評判秘伝理尽抄』の講義を聴き、質問までしたのである¹³⁾。

6歳の時に盛岡藩主南部重信(1616～1702)から白石を養子にしたいという申し出がなされるが、利直は白石が家臣の子であり、自分の母の可愛がっている子であるの理由で断った。ところで、土屋利直とその母があまりにも白石を溺愛していた事で、藩中には白石が殿様の隠し子ではないかという噂さえ広がったのである。7歳のときに、疱瘡にかかり、危篤状態に陥った白石のために、利直の母はウニカウル(一角獣)という希少高価な西洋の薬品を買い求め、そのお陰で白石は一命を取り留めた。これは過小評価されがちな出来事だが、思うに白石が後に西洋科学の優位性を認め、蘭学の鼻祖に成り得たルーツはこのエピソードにあると思われる。

白石は藩主に溺愛されたとはいえ、父正済に

は相当きつく躰けられた。8歳から本格的に習字を始め、9歳の時、父の立てた日課に従って、日のあるうちに、行書・草書の3000字、夜になって、1000字を書かなければならなかった。これは昭和初期の修身の教科書の題材となった有名なエピソードで、『折たく柴の記』に次のように記されている¹⁴⁾。

我父も、戸部(民部少輔の唐名、藩主土屋利直)の御いつくしみによりて、つねにかたはらをはなれまいらせず、学に入れ、師にしたがはしめむ事もかなふべからず、されどいとけなきより、物をかく事をば、戸部も人々にかたりほこらせ給ひし事なれば、せめて物をばかき習はしめたくこそ侍れとて、我八歳の秋、戸部の上総国にゆき給ひしあとにて、手習ふ事をおしへしめらる。其冬の十二月半ば、戸部帰り参り給ひしかば、つねにかたはらにさぶらふ事もとのごとく、明けの年の秋、また国にゆき給ひしあとにて、課をたてられて、日のうちには、行草の字三千、夜に入りて、一千字を限りてかき出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課いまだみだざるに、日暮んとする事たびたびにて、西向なる竹縁のある上に机をもち出て、書終りぬる事もありき。また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪がたきに、我につけられしものと、ひそかにはかりて、水二桶づつ、かの竹縁に汲をかせて、いたくねぶりの催しぬれば、衣ぬぎすてて、まづ一桶の水をかかりて、衣うちきて習ふに、初ひややかなるに目さむる心地すれど、しばし程経ぬれば、身あたたかになりて、またまたねぶくなりぬれば、又水をかかす事さきの事のごとくす。二たび水をかかりぬるほどには、大やうは課をもみてたりき。これ我九歳の秋冬の間の事也¹⁵⁾。

白石がこのように集中的に習字が出来たのは、毎年利直が領地久留里に行っている間、つまり秋から冬にかけての間である。その努力が

実を結び、11歳から父親、13歳から藩主の手紙の大部分を代筆するようになる。

Ⅱ 道との出会い

1. 『翁問答』

子供から青年に成長すると、白石の興味は次第に文から武に移っていき、少年白石は剣の修業に明け暮れる。父が戦国時代の古武士的気象を持った人物であった事を考えれば、白石が早い時期(11歳)から武道に興味を持ったのは自然な事である。15、6歳になってからの白石は、春から夏にかけて両親と共に江戸屋敷に住んでいたが、秋になると藩主に従って久留里城に行くことになる。17歳の時、白石のそれ以降の人生の矛先を決定付ける運命的な出会いがあった。

十七歳の時に至て同じやうにめしつかはれし、わか侍のもとにゆきしに(長谷川といひしもの也)、案の定に書あるを見れば、翁問答と題せしもの也。いかなる事をやるしぬらむと思ひて、借る事を得て、家に携帰りて見るにこそ、初て聖人の道といふものある事をばしりけれ。これより此道にころごし切なりけれど、師とすべき人もあらず¹⁶⁾。

17歳という成長期の最終段階に入った青年白石は、底知れぬ知力と体力に溢れていた。自分や周囲をやや持て余し気味の彼にとって『翁問答』¹⁷⁾との出会いは決定的であった¹⁸⁾。これによって自分が深く学び極めねばならないのは『太平記評判秘伝理尽抄』のような軍記物ではなく、「聖人の道」所謂儒学と悟る。これを機に白石の猛勉強が始まる。「小学の書を日夜に誦じ習ひて、業すでに畢るぬれば、四書を誦じ習ひ、その、ちまた五経を誦じ習ひ」¹⁹⁾しかし白石の儒学は総て独学で、読み方を教えてくれる人も居ないので、その時代で使われていた字引の元祖とも言える『韻会』と『字彙』を手元において1つずつ意味を調べた²⁰⁾。「これら皆一

句読を授し師あるにもあらず、みづから韻会・字彙等の書によりて誦じ習ひたれば、後におもふに、ひがことのみぞ多かりける」²¹⁾。凄まじい努力である。しかしここで1つの疑問が生じてくる。この2つの書物は決して安値で手に入るものではなかったが、どのようなルートを辿って白石の手元に届いたのかは解明出来ていない。考えられる唯一の可能性としては白石を大変可愛がっていた藩主土屋利直の母から与えられたのではないかということである。

2. 血氣盛んな青年

白石は17歳の時に、儒学と出会い、それ以後「聖人の道」を志したとはいえ、彼の振る舞いには血氣盛んなところが多々あった。18歳の時、藩主からお咎めを喰らってしまう。理由は久留里城に宿直せねばならなかった白石が、領地内で行われた狩を勝手に見に行ってしまったからである。その罰として家から出る事を禁止されてしまう。丁度その月の末に、若侍同士の言い争いがあり、それが御家騒動に発展しかねない一触即発の状態となった。白石はお咎めを受けている状態であったにも関わらず、その血氣盛んな性格が我慢出来る筈もなく、大罪を蒙る覚悟で争いに参加する気満々だった。しかし、結局その危機は幸運にも免れた。後日、友人が白石のとうとうとした行動、つまり謹慎処分を無視して藩邸の西門を守る守衛老夫婦を斬り殺し、鍵を奪って脱出し、騒動に参戦しようとした事は二重の罪を蒙りかねないと指摘した事に対して、白石は以下のように答えている。

当時我もし勘気をも蒙らざらむに、人々のかゝる事ありありと聞て、ゆきてたすくる事なからむには、たとひ戸部ものたまふ事こそなからめ、内々には我ふるまひをよしとは思ひ給ふべきかは、さらば、勘気をかうふれる身也といふいとも、手がし足がしぬられたるにもあらばこそ、それに人々の戦死せんをよそに聞て、我ひとり家にこもり居たらむには、事を公義によせて、幸に死をまぬかれた

る也とこそ、人も思ふべけれ、とても横紙をやぶらむに、何条主の勘気をも憚るべき、我またおとなしきほどの年齢にもあらむには、成すべき古麻痺もあるべけれど、いまだはたちにもみたぬ我身也、さればかくおもひたちし事、たゞこれ我身の耻なからむ事をおもひしのみ也、人々の謝し給ふべき事とも思はず、といひしに、また答ふる事もなくして、帰りてその父にてありし人にかくといひしかば、あはれ父の子也けるものかなとて、涙を流して悦ばれしと聞えたりし²²⁾。

以上のように、『折たく柴の記』の記述からは読み取れる白石の行動と心情は、名を惜しむ武士の姿を鮮明に描き出しているのである。武士の大事な要素として気節を重視した父正済が息子の言葉に感動を覚えたのも当然であろう。

藩主土屋利直が他界すると藩内の御家騒動が再び勃発し、新藩主の土屋頼直(1634～1681)²³⁾は新井家がこれと関わっているのではないかと勘違いし、それが災いして1677年(延宝5)2月、正済、白石兩名は永久に土屋家から追放される。このような形で仕事を失った新井家のメンバーは永久的に再就職の道を絶たれた。白石の両親は熱心な仏教徒ということもあり、出家し、正済の血縁が当時の坊主だった浅草・報恩寺の中の庵にひっそりと住んだ。白石は家僕1人を連れて、浅草の街中に住んだ。追放されてからの1年2ヶ月は新井家にとって不幸続きであった。姉妹2人と母千代がたてつづきに他界する。白石と正済の心痛と悲嘆に関して『折たく柴の記』では「此のちは老給ひし父と我と、たゞふたりにのみなりぬれば、よろづ物悲しかりし事共、いふばかりなし」と記されている²⁴⁾。

しかし土屋家を離れてからの浪人生活は白石にとってプラスな面もあった。その中で同じ道を志した仲間と出会い、自由に学問出来たのは一番の収穫だったと言えるのである。

3. 武士至上主義

『折たく柴の記』によれば、正済に対して2回にわたって、裕福な商人から息子を養子に迎えたいという誘いがあった。1回目に対しての白石の答えは以下のものである。

かくわびしく渡らせ給ふ事を見まいらするに、いかにかなしくは覚え侍れども、御子とむまれしものの、ひとの子となるべしとはおもひもかけず、かく悲しくおもふ事も、武士の家に出てつかふる事の、かなはざる故に候ものを、我身に及びて、おやおうちの取傳へ給ひし、弓矢の道をすてて、商人の家つぐべしともおもひ候はず²⁵⁾。

白石の価値観では、商人となって父に物品を与えることではなく、浪人をの極貧生活を耐え抜き、未来に備えながら武士の身分を保つ事が最高の親孝行であった。

『折たく柴の記』によれば、2回目の養子縁組話は最も魅力に満ちた誘いであった事が分かる。それは、相手が天下の大商人河村瑞賢(1618～1699)だったからである。この縁談は瑞賢が白石の器と可能性に目を付けて、孫娘の婿にしようとしたものである。

宮崎が指摘するように、この話は『閑散余録』(南川金溪)や『仮名世説』(大田南畝)の両書にも紹介されていることもあって、江戸後期には広範囲に知れ渡り、学者界の中では語り草となっていた事件である²⁶⁾。この件に関しては、白石自身も詳細に述べている。

かかりしほどに、また当時天下に雙なしなどいふ豊商の子の、学ぶ友となりぬる事出来しに、その子のいひしは、我父たるものを見まいらせて、必ず天下の大儒ともなり給ふべき御事也、我亡兄のむすめの候なるにあはせまいらせ、黄金三千両にもとめ得し宅地をもて学問の料となして、ものまなび給ふやうにと、某が心のやうに申せとこそ侍れといふ²⁷⁾。

しかし白石はやはり今回も首を縦に振るような事はしなかった。その断り方は実に奇妙で面白い。『折たく柴の記』に見える白石の答えは次の通りである。

我今、身まづしく窮りたれば、人知れるものにもあらず、此身のままたて、そこの亡兄のあとをうけつぎなむには、その疵なを少しきなるべし、もしのたまふ所のごとく、世にしらるべきほどの儒生ともなりなんには、その疵は殊に大にこそなりぬべけれ、三千両の黄金をすてて、大疵あらむ儒生なしたてられん事は、謀を得給ひたりともいふべからず、たとひさしきる所の小しき也とも、我もまた疵かうぶらむ事をねがはず、我かくこそ申したれと答給へといひたり。後にきけばしかるべき儒生のその娘にはあひぐせし也。その豊家は河村といひし、その孫女の夫は黒川とかいひて、其父祖ともに儒に名ありし人也。此事をも父にておはせし人に語り申ければ、めづらしからぬ事なれど、よき諭にもありつるかなと、わらひ給ひたりき²⁸⁾。

やはり白石にとって武士であり続ける事こそが絶対であり、骨の髄までに墨守せねばならぬレゾナートルであった事が理解出来る。それが故に当時の数多くの儒学者と違って白石は医学の道にも進まなかったのである。

白石は長年に渡って極貧生活を耐え凌がざるを得なかったが、その浪人生活のお陰で、日常的に町人や農民等と接する機会を得た。宮崎によれば、そのような経緯は白石に庶民に対する深い愛情を芽生えさせ、それは彼の政策や関わった訴訟等にも反映されていくのである。

確かに白石は武士階級以外の人間を上から目線で見下ろさずに限りなく同等に扱っていた。しかし、その一方で彼の振る舞いから稀な程頑固な「武士至上主義」が浮き彫りになっている事も指摘すべきである。

Ⅲ 詩の達人

1. 俳人浅草桐陰

親子が土屋藩を追放された1677年(延宝5)から再就職が決定する1682年(天和2)までの間、貧窮しながらも、町中に於ける白石の知的活動は極めて活発であり、自分の思想の基礎を築きながら、俳人として江戸中にその名を轟かせる事となる。1680年(延宝8)、俳諧集『江戸弁慶』が刊行される。これには春夏秋冬の季語別に計682句が選ばれている。その中に24歳の白石の句が2つある。作者いずれも浅草桐陰とあるが、これは青年白石の俳名である。

30年後、白石が友人の室鳩巢(1658～1734)と宴会しながら、若い時に俳諧にかなり熱中し、「桃青らと競り合った」と語ったと室鳩巢への書簡(兼山秘策)にある。

新井氏も若き時分俳諧を好み、随分よく被_レ致候て、桃青(芭蕉)抔とせり合被_レ申候由、桃青も歌人にて、李白を学び候て桃青とつけ申候由に御座候、只今世に板行の内に新井氏の句出申由にて候、かくし名桐陰と申候、桐陰と有_レ之は新井氏にて候由被_レ申候²⁹⁾。

桃青は松尾芭蕉(1644～1694)の俳名の1つである。当時、青桃(芭蕉)37歳、桐陰(白石)24歳、果たしてこの2人が本当に競り合ったかどうか、興味深い話である。

あれ程俳句に熱中していた白石が、ある日突然俳句作りをやめると鳩巢に打ち明ける。

その理由は、ある時『孟子』の「幽谷を出でて喬木に遷る」という文章を読んで、俳諧に時間を使うのは「喬木を下りて幽谷に入る」のようなもので、自分の目的(身を修め、機会がくれば社会を整え、国を治める)に反する。喬木(儒学)を極めるためには、幽谷(俳諧)を諦めねばならないと言う訳である。喬木(高い立派な木)より、雑木の生い茂った幽谷の方が居心地がいかもしいかもしれないが、天下を運営するにはやっば

り喬木に昇らないといけないわけである。

或時孟子の出_ニ幽谷_ニ遷_ニ喬木_ニの章をよみ候て、たちまちに前非を悔申候て、夫より俳諧をやめ申候、学者は詩文など工夫仕候筈に候処、夫に俳諧好も候ては下_ニ喬木_ニ幽谷_ニ入_ニと申ものにて候³⁰⁾。

白石が俳諧の世界と縁を切った最大の理由は、儒学を目指すには、漢詩をマスターするのが絶対的な条件であり、俳諧の世界で戯れてしまうと無駄にエネルギーを浪費し、自分が志した道に背いてしまうのではないかと本人が実感したと推測出来る。

2. 漢詩と朝鮮通信使

このように、俳諧の世界から身を引いた白石は漢詩作りに莫大なエネルギーを注ぐようになる。唐時代の詩人(杜甫、白居易等)の作品を熱心に勉強し、少しずつ修得していくのである。白石を非難し続けた荻生徂徠(1666～1728)でさえ、その漢詩力に対して「君美、東都に竜挙す」と脱帽せざるを得なかった³¹⁾。

1682年(天和2)に徳川政権第5代將軍綱吉(1646～1709)の將軍襲職を祝うために恒例の朝鮮通信使節団が来日する。朝鮮王朝からしてみれば、清朝の支配による国力の衰退という現実の前では、国威発揚の限られたパターンは文化先進国として振舞う事であった。日本側の文化人と接触到に備えて、朝鮮の使節団は詩文・書画・音楽に優れた人材を集めたもので、その総人数は475人であった³²⁾。

対馬出身の学友阿比留西山順泰(1660～1688)³³⁾の紹介で、白石の漢詩百首が朝鮮使節に届けられる。朝鮮使節の文化人は漢詩の多さと質に驚く。朝鮮の知識人によると、日本の詩人は中国の本来の漢詩にはあまり親しんでおらず、従ってその作品が和臭に満ちているとされた。だからこそ、白石の精巧な漢詩を見た使節団員は驚嘆した。

阿比留の働きによって、白石が一日席を設け

てもらって、共に作詩を楽しみ、筆談し、また阿比留の通訳によって談笑するという風に事態が進展する。この白石と朝鮮通信使の最初の出会いに関して、『折たく柴の記』には以下の記述がある。

かくて廿一歳の時に至て、予州（土屋頼直）の家をさりしかば、此時に及び手こそ、同じ志の人々をあひしりて、ものまなぶ事をも得たれ。されどおもふ所あれば、師をもとむるには及ばず。此比よりぞ対馬国の儒生阿比留といひし人をば相識ける。廿六の春ふたゝび出てつかふる身となりぬ。ことしの秋朝鮮の聘使来れり、かの阿比留によりて平生の詩百首を録して三学士の評を乞ひしに、人を見てのち序作るべしといふ事にして、九月一日に客観におもむきて製述官成琬、書記官李珊齡ならびに裨將洪世泰などといふものどもにあひて詩作りし事などありし、其夜に成琬我詩集に序つくりて贈りたりき³⁴⁾。

白石自身も述べているように、対馬の西山順泰を介して、客館に充てられた本誓寺に製述官成琬・裨將洪世泰らを訪ねて、自分最初の詩集『陶情集』に成琬と洪世泰から序文と跋文を贈られる。

以下に『陶情詩集』の序文と跋文を紹介する³⁵⁾。

声は古の侯喜に似、域内詩に老ゆる者といえども、局影袖手、白石公と其の文柄を争う者有るなし、白石それよく詩を学ぶ者と謂うべきなり、白石公それ一世の騷壇風流の宗というべきなり。

余、館中に在りて陶情集有るを見る、清新雅麗往々沙を披き金を揀ぶ処有り、人をして刮目せしむ、真に作者の手なり、その人を見るに及べばその詩に勝る、いわゆる表裡一の如き金玉の君子なり、翠虚成拍圭氏序を作り之を發揮す縷々数百言、余茲に敢えて贅せ

ず、只その梗概を書すとしかいう。

以上のような序文と跋文を見れば、若い白石の漢詩力は既に高いレベルに到達して、それは朝鮮の知識人にも認められた事から分かるのである。次の第8次通信使節（1711年、正徳元）の際、白石の新たな漢詩集『白石詩草』が更なる絶賛を浴びる。しかし『白石詩草』は『陶情詩集』と異なり、単なる一個人文化人の詩集としてではなく、幕府の文治を担っていた白石が朝鮮の優越感に対抗すべく、日本の文化威信をかけながら手掛けた漢詩集である事に大きな違いがある。

ちなみに白石の漢詩集は朝鮮のみならず、琉球使節を通じて中国でも知られるようになるが、これは後の出来事であるので、簡単な紹介に留める。1710年（宝永7）に白石の詩集『白石余稿』が、友人深見玄岱の斡旋により琉球を通じて中国に渡った。しかしこの場合、清と幕府の間に正式な国交がなかったため、琉球の役人の工作によって白石は琉球人という形で、その詩集が中国に渡ったのである。最終的に『白石余稿』は琉球使節を通じて翰林院修鄭任鑰に届けられ、これを読んだ鄭任鑰は驚き、白石の詩は唐朝の盛時の大詩人達の長所を併せ持っているものであると絶賛し、その『白石余稿』を珍重した。それとは別に写本を作り、それに序文を付け琉球人に渡した。それは1714年（正徳4）の冬に薩摩藩から玄岱に届けられ、最終的に白石に渡されたのである。

最後に、詩人像としての白石に関する評価としては足立栗園の記述を紹介する。

文運の拙きことは既に遙かに日本海を隔てて東亜大陸にさへ聞え、かの小弱附庸の朝鮮人すら、よく中華の文明を倣倣するとして、揚々として我を持つに一木強漢とのみ想像侮慢し。居たりしなり此時に於て朝鮮聘使の手に、一書生白石の鍛え成されたる唐詩は渡されにき、日本の文化は徳川に入りて早くもかくの如きかと驚愕せしめぬ。(略)。白石は即

ち其政治界に於て雄飛する前に於て、一詩人として成功したりしなり³⁶⁾。

足立栗園の記述通り、白石の才能が真っ先に開花したのは詩の世界であり、漢詩に目覚める以前に、俳諧界で松尾芭蕉と篠木を削ったと言われる程、彼はトップまたはそれに近い地位に君臨したのである。儒学の道に深く心酔するにつれて、俳句を捨て、漢詩に目覚めた彼が、輝かしい過去と同等かそれ以上の成功を収めるようになるのは人並みはずれた努力と選り抜かれた人物にしかない才能のお陰であったと言えるだろう。現代の我々には白石は様々な分野に於いて精力的に活躍した人間であるという認識を持っているが、白石は同時代の人々の間に先ず詩人として名を馳せた事を考えれば、足立栗園の記述は完全に的を射ていると言えるのではないか。

IV 堀田家から甲府藩へ

1. 堀田家に仕官

母千代の死で(1678年〈延宝6〉)新井家の不幸は底をうち、それ以降、次第に状況は好転する。『折たく柴の記』によれば、「我廿三歳の夏の比、予州(土屋頼直)の家滅びしかば、前にしるせし事のごとく、我つかへの塗(みち)もおのづからひらけたり」³⁷⁾。ちなみに、土屋家の事だが、土屋頼直(2万石)が改易になったが、息子に少々(3千石)の所領が与えられた。

大老堀田正俊(1634～1684)に白石は学者としてではなく、武士として召抱えられたが、その禄高がどれ程だったのかは不明である。白石が堀田家の仕官になったのは26歳のとき(1682年〈天和2〉)であった。脂の乗り切った青年武士の白石がその年に、同じ家臣の朝倉長治の娘と結婚する。息子の社会的な立場が安定し、やり残した事はないという安堵感からか、同年、82歳の老父が他界する「此年我つかへにしたがひしより、わづかに百日にもたらずして、わかれまいらせし事のかなしけれど、御あとの事ど

も、思し置事なくして終り給ひしは、せめての幸にもおはせしなるべし。是年八十二歳にておはしましたりき」³⁸⁾。

よく知られている通り、8月28日、江戸城の城中で、大老堀田正俊が若年寄り稲葉正休(1640～1684)に刺殺された。正休が直ちに駆け付けた侍に瞬殺されるという事件によって、幕府は一瞬に2人の有能な人材を失い、綱吉の専制政治へのきっかけを作ったと言われていた。

ともあれ、正俊の死によって、堀田家の求心力が急速に弱まり、藩を去る仕官は後を絶たなかった。その状況について、白石は次のように書きとめている。

かくて筑前守紀正俊朝臣(堀田正俊)にすゝめしものありて、廿六歳の三月に、彼朝臣の許に出て仕ふ。一年を隔て、廿八歳の秋、筑州の事おはしまして、其嫡男下総守正伸朝臣、彼あとをづがれしかど、不幸の事のみ打続きて、後には家人等を扶助すべき事も意のまゝならず、皆へ、其禄を減ぜられしほどに、禄を辞し去るものどももすくなからず³⁹⁾。

こんな状況下でも、白石は数年間に渡って堀田家に留まる。火が消えたような堀田家に残った白石は徹底的に儒学の經典と歴史書を研究する。この貴重な時間を得たお陰で、「されど、いとま多かる身也しかば、比時にこそ、経史の類をも涉獵せし事はありつれ」⁴⁰⁾浪人時代に築いた基礎の上に自分の学問の骨格を完成させた。

ちなみに、この時期に友人の阿比留は既に木下順庵(1621～1699)に弟子入りしていた。彼は朝鮮使節との事を順庵に話し、白石のことを熱心に宣伝する。結局、阿比留の努力が報われ、白石が1686年(貞享3)に「これらの事によりて、我も彼門に出入る事の年を経しほどに、まさしく束脩の礼を報るにも及ばで、したしき師弟とはなりたる也」⁴¹⁾の形で、白石は木下順庵に弟子入りする。それから2年、阿比留が若く

してこの世を去る。白石21歳、阿比留18歳で始まった2人の交流が終焉する。結局、朝鮮使節の時も、木下順庵の時も阿比留は、白石にとって常にありがたい水先案内人のような役割を果たし続けた。

彼に対して白石は、『停雲集』に於いて以下のように記述している。

年二十余、州辟書記となす、因って業を木先生の門に肆め、みづから学ぶの晩きを恨み、勤苦書を読み昼夜息はず、才思敏贍、文章を作り為す輒ちにして数百千言、其の疾病に及んで乃ち其の僕に命じ平生の稿を取り之を焚きて曰く我が文章のごとき何の用か後に遺すを為さんと、元禄戊辰秋九月、学舎に没す、年二十九、先生深く其の才を惜み、自ら碑銘を撰し、之れを東武郭北養玉院中に葬る⁴²⁾。

閑古鳥が鳴いている堀田家で、白石は研究し、さまざまな知識を蓄えていくのみならず、生産的な仕事もしている。それは『奥羽海運記』⁴³⁾と『畿内治河記』の2作である。漢文体で書かれたこの2書は、それぞれ海運、治水についての歴史的な考察を行い、同時代の豪商河村瑞賢を中心に書かれた作品である。白石が10年弱前に瑞賢の養子になる事を断ったのに、最初のメジャーな作品(詩集以外)は瑞賢を主人公にしたものだった事は誠に不思議なことであり、皮肉にさえ思ってしまう。宮崎によれば、ある意味でこの2作品は実証主義者(現実主義者)白石らしい出発点であったと言えるのである⁴⁴⁾。

2. 堀田家を去る

堀田家に仕官してから9年が経って、白石は辞職願を出す。『折たく柴の記』によると「たゞいかにしても、我家をさらむ事思ひとゞまるべしとありし」⁴⁵⁾と辞職願が直ぐに受諾された訳ではなかったが、白石の意志が固くて、やっと受け入れてもらう事に成功する。堀田家を去る

1691年(元禄4)の秋に長男明卿が生まれる。白石にとって思い切った決断であったと謂えるだろう。

此時におよびて、家に余れる資財をはかり見しに、青銅三百疋・白米三斗には過ぎ。よし―忽に餓ふる迄も事もあらじといひて、妻孥引ぐして、年比師檀のゆかりにつきて、高德寺にゆき至り、やがて浅草のほとりに家借りて移れり⁴⁶⁾。

78年前に父正濟は僅か13歳で銭1貫文を持って江戸に出たが、妻子を連れて堀田家を出た35歳の白石の全財産も充分なものであったとは到底謂えるものではなかった。しかし右も左も分からずに江戸を目指した父と違って、資金的な財産が乏しくても、堀田家で蓄えた知的財産は図り知れないものであり、それが何よりも強みであり、白石の自信の源であった。白石は塾を開き、それが大繁盛した「来り学ぶものも日々に多くしかるべき人々も就きて学ばれしすくなくならず」⁴⁷⁾のである。白石は自由な市井人としての生活を満喫するが、この状況は長く続かなかった。2年後、白石の人生を変える出来事が待っていたのである。それはいうまでもなく、後の第6代将軍家宣(当時甲府藩主の綱豊)との出会いである。

3. 甲府藩に仕える

木下順庵を初め、門下の中で白石の評価は極めて高かった。順庵は白石の就職には格別留意したようで、1692年(元禄5)に嘗て自ら仕えた加賀の前田家へ白石を推薦する事になる。宮崎によると、白石ほどの英才が浪人生活を続けている事を見かねて、前田家への就職活動を実際に推進したのは親友の室鳩巢だったらしい。ところが、これを伝え聞いた同門の岡嶋仲通が国元加賀に母の居る事を理由に、白石に順庵の推薦を断るように願い出た。白石は直ちにその要請を受諾し、即日、順庵に対して前田家への出仕を固辞した。そのお陰で岡嶋は望み通り順

庵の推挙により前田家に仕える事になる。

我師なる人は、我をばそのむかしつかへられし加賀の家にすゝめん事を思給て、そのあらましなど聞え給ひしに、加賀の人にて岡嶋といふが、我を頼みたりしには、我本国に老たる母のあれば、いかにもして先生推薦給らむ事うい申して給るべしといふ。我其事の由をつぶさに申して、某つかへに従はん事は、いづれの国をも撰ばず、彼人は老たる母の候なる国に侍れば、某に代てすゝめられん事某も又望む所也、けふよりしては、某を以て彼国にすゝめられん事、固く辞申す由を申切りてければ、此ことをつくづくときゝ給ひ、今の代、誰かはかゝる事をば申すべき、古人を今に見るとは、かゝる事にこそ、との給ひて、涙を流し給ひしが、此後常に此事をば、人々にも語り給ひたりけり。されば、やがて岡嶋をば、彼国にすゝめられき⁴⁸⁾。

このエピソードは美拳として戦前の修身の教科書に記載されているが⁴⁹⁾、白石が単に人情に動かされて、前田家への出仕を譲ったのかは不明である。確かに加賀藩は学問をするには絶好の条件を揃えた環境であった反面、17歳以降に志した「聖人の道」を全国的な規模で実践出来なくなる事も白石の頭を過ぎった可能性を否定出来ないのである。

ともあれ、就職は実現しなかったと雖も、白石と前田家との縁は深く、藩主綱紀(1643～1724)は白石の学識をこの上なく尊敬し、他方白石の方は、著述作業(特に晩年の)のために前田家の蔵書を利用したので、両者の間の学問的交流(小瀬復庵(1669～1718)を通じて)は密であった。その表れとして、白石が幕閣からの引退後に『西洋紀聞』等の秘匿書類を貸し出した事実がある。加賀藩の蔵書は幕府の紅葉山文庫のそれに次ぐ歴大なものであったから、第7代將軍家継の死去が原因で政治の表舞台から身を引いた白石にとって極めて利用価値の高いものであり、ある意味で自分の研究を支える

生命線とも言えるものでもあった。既に述べたように白石は加賀藩から資料を借りたばかりでなく、自分の作品の副本を大量に贈った。何回も火事に見舞われてしまった白石からしてみれば、副本を同藩の文庫に残すのは最も確実な安全策だったのである。

運命の針が決定的に動き出すのは1693年10月の事である。甲府家の家老戸田忠利(1637～1712)の命を受けた高力忠弘(1648～1696)が順庵を訪ね、門人の白石を召抱えたい意向を伝える。30人扶持で採用したい意向を伝えたが、順庵の反発に合い、40人扶持に増やすが、それでも順庵は納得しなかった。その理由は白石が門下の中でずば抜けた存在であり、そのような小祿での召抱えを許すわけにはいかないとのことであった。しかも白石は本来儒者としてではなく、武士として封祿を受けてきた者であるから、それと見合うものでなくてはならないとの事であった。

はじめ我師の心にみち給ひはざりし事は、祿米三十人を扶持すべき料給はるべしとの事也しかば、学の優劣は祿の厚薄によらざる事勿論也、されど世の人は、祿厚ければ学優也と思ひ、祿薄ければ学も劣れりと思ふ事よのつねなり、我門にさぶらふものゝ中、かれにしかざるも、なをさほどの微祿のものはあらず、かれまたもとより、儒をもて業とせしものにもあらず、今までつかへにしがひし祿米のほども候ものを、のたまふ所のごとくにて参らせむ事、得こそかなふまじけれとのたまふ⁵⁰⁾。

こうした順庵の態度に対して白石は招聘を受けたいとの決意を述べている。その理由として、甲府家は「他家の事に准ずべからず」というのである。

我なをおもふ所あれば、此事いかにもかなふべからず、とのたまふ。当時彼藩邸の事、他家の事に准ずべからず、もし祿の多少を論

じて、そのまねきに応ぜざらむには、これより後、他家の人へのまねかるゝ事ありとも、禄厚きにあらずは、それに応ずべからず、たゞしるべからざる所の事は、我命の厚薄いかにや候べき、同じくは、予州のはからひにまかせらるべきや候と申す⁵¹⁾。

この答えに対して順庵は白石の熟慮を促したが、その意志が固い事を覚った上で、高力忠弘に承諾の書簡を送り、甲府家へ出仕が決定となったのである。

甲府藩への就職には、林家側の不可解な動きが大きな要因となったのである。元々甲府家は林家の弟子を召抱えたかったのだが、甲府藩に対する不信感を抱いていた綱吉の逆鱗に触れないために、林信篤(1645～1732)は甲府藩に対して自分の弟子を推挙する事を拒み続けたのである。この行動は綱吉が將軍職を就職した後に表面化する信篤不信に繋がったのである。ともあれ、このような事情も手伝って、白石の甲府藩への就職が実現した訳である。

白石の甲府家への正式の出仕見参は1693年(元禄6)12月16日の事で、3人の家老立会いのもとに綱吉に面謁した。白石の待遇に関しては「御扶持方手形案文」と題する届出草案中には以下のように記されている⁵²⁾。

請取申御扶持方之事

米合七拾貳石者、但京升也
右是者、四拾人扶持、当西ノ十二月十六日儒者ニ被召出
新規拝領仕候付(後略)。

この『日記』の記述からは、白石の待遇は約束通り「四拾人扶持」であった事が分かる。

甲府藩への出仕を決断した白石に、学者として野心的な側面の存在を認めるべきかどうかという点に対して研究者の意見は分かれている。宮崎はそのような疑いは白石に対する単なる中傷でしかないと論じているが、果たしてどうだろうか。彼は虎視眈々と権力を手中に収め

るためのチャンスを狙って、將軍の跡継ぎに成り得る甲府家への出仕を選んだという三上参次の「白石権謀家説」は幾らなんでも大袈裟すぎる。元々綱吉に最後まで跡継ぎが生まれなかった事が最初から分る訳ではなかったからだ。しかし、白石は自ら甲府家が特別であり他の家と同率に論じてはならないと述べている事からも、扶持の事をさておき、この家に仕える事によって、運次第では自分の儒学をもっと大きなスケールで活かす事が出来るという計算は白石にあったと思われるし、それを全く否定するのは些か不自然すぎるのではなからうか。

甲府家への出仕は、白石にとって第二の人生の出発点とも言えるものであった。その証拠としては、白石の『日記』の記述がこの就職問題の発生から始まっている事である。『日記』の記述期間は木下順庵による甲府藩への推挙の1693年(元禄6)10月10日から、嫡孫邦孝出生の1723年(享保8)8月26日までとなっている。

明らかに公式のドキュメントという意図で執筆された『日記』は「生涯の唯一の主君」なる綱吉(家宣)からスタートし、新井家の安定を約束した孫邦孝の誕生を以って終わるのは単なる偶然ではなく、この両出来事(特に前者)が白石にとって、人生の大きなターニングポイントであった事を物語っているのである。

結びに代えて

一生涯の3フェーズ

白石のような人間は500年に1人の逸材であるとシドティは称賛したが「五百年の間に1人ほど生れ出るととき人」⁵³⁾ その評価は誇張だと思えない。

新井白石が後の世代に残した学問的な功績は正に絶大であり、近代学問の父とさえ謂えるのである。この点に関しては羽仁五郎の言葉が説得力があろう。

白石は、近代に於いて鳥居龍蔵がその著、「極東民族」第一巻総論 アイヌについて「お

そらく白石の蝦夷志ほど完全なものはない。この書は立派な人種誌で、我国の人種人類の研究者はぜひ充分参考せねばならぬ。白石は実に我国の各種の父であって、かつて上田博士は言語学上より見たる白石を書かれたが、私はまた白石は実にわが人類学人種学の父であると云いうる」と記していたように、この『蝦夷志』また『南島志』などの著述によって日本に於いてはじめて民族学の学問的方向を確立していた。そして、また、白石は、学友佐久間洞巖にあたえる手紙のなかに、「石鏃石罅、国史には降りたりと心得てしるし」ているが、「これは人の細工にてこしらえしものにて」と、考古学的に出土物また遺跡などが「人の細工にてこしらえしもの」すなわち一定の生産物であることを明確に認識し、そこに、したがって、一定の生産様式および生産関係をそれらの出土品また遺跡などについて研究することこそ歴史考古学の最も主要の目的であらねばならぬとする現代の認識へのみとおしをひらいていた⁵⁴。

しかし、白石は何故、ありとあらゆる研究分野に実績を残せたのだろうか。無論ずば抜けた頭脳明晰な人物であった事は言うまでもない。しかしそれだけでは彼が残した功績を説明するには不十分である。白石の人生を3つのフェーズに分けて考えると、彼の学問が辿ったプロセスなどが見えてくる。

第1期 誕生から主君綱豊(家宣)が將軍職に就くまでの時期(1657～1709)

これは白石の性格と学問が形成される極めて重要な時代である。青年白石は波乱万丈な人生を送るが、それが後々に大きな意味を持つことになる。先ず、彼が理想的な両親に恵まれた事を指摘しなければならない。古武士的風格を持った父親のスパルタ教育の下でどんな政敵も圧倒し得る「烈火」の如く激しい性格が形成されていき、同時に優雅な母親が施した教育のお陰で早くから文学の世界に親しんでいくのであ

る。上田万年が指摘するように白石は父から剛毅卓犖の性格を受け、母から学問の才能を受け継いだと断言出来るのである。

17歳に『翁問答』を通じて「道」に目覚め、独学で儒学を学習し得たのは、子供の頃から彼を溺愛した土屋利直とその母が恐らく与えたであろう『韻会』と『字彙』のお陰である。土屋家からの追放が引き金になった青年時代の極貧生活は大きな試練となるが、浪人時代の自由な空気の中で勉学に励んだ結果、白石はその学問的基礎を構築する事が出来た。更に同時期に朝鮮の知識人などが彼の漢詩を絶賛した事で自信を深める事も出来たのである。

後に白石が仕官した堀田家が忽ちに求心力を失った事も最終的に彼にとって大きなプラスとなった。ここで白石は有り余るほどの時間を得て、9年の歳月をかけながら自分の学問を見事に成就させる事が出来たのである。この点について論じる場合、白石は30歳の時に師事した木下順庵の影響を考慮すべきである。

白石の学問は決して窮屈なオーソドックス主義に支配されたものではなく、強い独創性を持っていたのは彼がその波乱万丈な人生から多くを学び、その経験を基礎にして書を読んだからである。確かに白石は独学でその学問的基礎を築いたのは疑えないが、師匠木下順庵の影響も無関係とは謂えない。順庵は旺盛な知識欲の持ち主で、中国の天文、歴史、礼楽、兵術の書等によく通じていたと言われている。学者として必ずしも独創性に富んでいた訳ではなかったようだが、大変良い教育者であったと謂える。新井白石の他に、室鳩巢や雨森芳洲(1668～1755)は木門出身の儒学者である事を考えればその事実は一目瞭然であろう。このように個性豊かで違う特徴を持った儒者をこの世に送った順庵は、その弟子を愛し、それぞれの資質に合わせて才能を最大限に伸ばした。例えば白石の場合は常に彼を「証なく拠なくして疑しき事は、仮初にも口より出すべからず、孔子の大聖すら猶述而不作と宣ひし、たゞ古人の言を述ぶべし、自らの意見を以て言を造るべからず」諫め

たのである(『人名考』、『新井白石全集』/新井白石著;今泉定介編輯・校訂/吉川半七,第6巻,1907)。思うには、白石に於ける合理主義と実証主義の結合はその後者の重要性を説き続けた師の学風に負うところが大きいのではなかろうか。俳諧や漢詩の分野に於いて、既に名を馳せていた詩人白石が経験的合理主義者としてその本来の素質を伸ばせたのは師匠木下順庵の門下生になったからである。

堀田家を去った後、師匠木下順庵の反対を押し切って甲府家に仕官したのが白石の人生のターニングポイントであった。彼は綱豊が将来的に将軍となれる僅かなチャンスに賭けたのである。その可能性に備えて、それまで蓄えた知識が一気に爆発したかの如く、主君への帝王学としての形を変容していったのである。幸運な事に綱豊は家宣の名で第5代将軍綱吉の養子となり、見事賭けに勝利した白石の帝王学はさらに具体性を帯びてゆくのである。

第2期 家宣と家継の在職期(1709～1716)

徳川政権第6代将軍となった家宣の絶対的な信頼「仏氏の説に一糸分身とかいふなるは、我と彼との事也、彼あやまちあらむ、すなわちこれ我あやまち也、我また事をあやまらむには彼のあやまりともなりぬべし」⁵⁵⁾を得た白石は幕府の改革に取り組みながら、様々な外国人(朝鮮通信使や琉球二王子、江戸参府中のオランダ人やイタリア人宣教師のシドティ)との出会いにも恵まれ、遥かなる海外に目を向けながら自分の知識の枠組みを大きく広げていく。

第3期 失脚と隠居の時期(1716～1725)

家宣の子家継が死去したことにより白石は辞職し、彼を敵視し続けた幕府内の抵抗勢力が盛り返していく。白石が要職から離れたにも関わらず、新井家は凄まじい逆風を受け、それは娘の縁談にまで支障をきたす。しかし白石が余力を温存したまま隠居生活を強いられた現実こそが彼の壮大な研究を完成させる上で重要なポイントとなった。

白石はフェーズ①に於いて儒学を中心とした学問を主に独学で形成し、フェーズ②に於いてその学問を現実の政治に活かしていく。更に様々な分野に跨る研究を進めながら、海外にも目を向けていくのである。フェーズ③では、辞職以降の余生に強いられた隠居生活の中で蓄えた膨大な知識が開花し、数々の代表作を残せた事が人文地理学や蘭学、言語学等の先駆けと成り得た所以である。白石ほど様々な分野で功績を残した人物は稀有であるが、それを可能たらしめたのは本人の才能は言うまでもなく、絶妙なタイミングでこの3つの転換期が訪れたからである。

注

- 1) マリオ・トルチヴィアの最新の研究では、禁教後に最後の入国を試みたイタリア人宣教師の本名はSidotti(シドッティ)ではなくSidoti(シドティ)であると証明された。因って、著者もそのカタカナ表記を「シドッティ」から「シドティ」に改める。
- 2) カンパナ・マウリツィオ『西洋紀聞』—シドティとの奇会によって飛躍した新井白石の洋学とその性格—/『史泉』関西大学史学・地理学会107号/2008。
- 3) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京：近藤出版社、1985。
- 4) 土屋利直(1607～1675) 江戸時代前期の大名。慶長12年生まれ。土屋忠直(ただなお)の長男。慶長17年上総(かずさ)(千葉県)久留里藩主土屋家2代。元和7年徳川秀忠の近習となる。大坂加番をつとめた。延宝3年閏4月24日死去。69歳。通称は平八郎。
- 5) 白石の自伝である『折たく柴の記』については、岩波文庫版や英訳版Joyce Ackroyd TOLD ROUND A BUSHWOOD FIRE 1979なども参照したが、ここでは宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京：近藤出版社、1985(73ページ)による。
- 6) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京：近藤出版社、1985、73ページ。
- 7) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京：近藤出版社、1985、73ページ。
- 8) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京：近藤出版社、1985、90ページ。
- 9) 上田万年『興国の偉人新井白石』/広文堂、1917。
- 10) 深見玄岱(1649～1722)江戸時代中期の長崎唐通事、のち幕府の儒学者となる。祖父は明国福建の儒医高寿覚のこともあり、中国語に達者で、長崎

- では優れた通訳者として名を高めた。新井白石の推薦で江戸へ出て儒学者となり幕府に仕え、正徳元年(1711)の韓使来聘の時は『和韓唱和集』を作って活躍、「海舶互市新例」の策定にもあずかった。白石はその中国語に信頼を置いていたと思われるが、白石の退任後ほどなく致仕した。
- 11) 『新井白石日記』(下巻) 210ページ/新井白石[著]/東京:岩波書店, 1954。
 - 12) 宮崎道生『新井白石』東京:/吉川弘文館, 1989。
 - 13) 『太平記評判秘伝理尽抄』南北朝動乱を描いた軍記物である『太平記』の講釈は、太平記自体を読む形と太平記の人物や事件を批評する形の2つがあり、近世前期に流行したのは後者である。この講釈のテキストとなったのが、『太平記評判秘伝理尽抄』である。若尾政希『「太平記読み」の時代』1999によると、父正済が仕えていた土屋利直は、『理尽抄』を講釈する富田覚心なる人物を抱えていた。
 - 14) 尋常小学修身書/巻5 児童用/文部省著/復刻/東京:大空社, 1990. 6。
 - 15) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 108-9ページ。
 - 16) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 111ページ。
 - 17) 『翁問答』江戸前期の教訓書。2巻。中江藤樹作。1640年(寛永17)頃成立。1650年(慶安3)刊。孝行を中心とする道徳哲学を、分かりやすく問答形式で説いたもの。
 - 18) 『韻会』読み方によって字を分類する元代の辞典。『字彙』字の姿によって字を分類する明代の辞典。
 - 19) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 111ページ。
 - 20) 『韻会』読み方によって字を分類する元代の辞典。『字彙』字の姿によって字を分類する明代の辞典。
 - 21) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 111ページ。
 - 22) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 121ページ。
 - 23) 土屋頼直 寛永11年(1634年)、第2代藩主・土屋利直の長男として生まれる。延宝3年(1675年)に父が死去したため、家督を継いで藩主となる。同年12月、従五位下、伊予守に叙位・任官する。延宝7年(1679年)8月7日、狂気を理由に改易され、久留里城も破却された。48歳。祖先の功績などを考慮されたお陰で、土屋家は旗本として存続した。
 - 24) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 124ページ。
 - 25) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 126ページ。
 - 26) 宮崎道生『新井白石』:東京/吉川弘文館, 1989。
 - 27) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 130ページ。
 - 28) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 131ページ。
 - 29) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 補説135ページ。
 - 30) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 補説135ページ。
 - 31) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 補説400ページ。
 - 32) 李元植「新井白石と朝鮮通信使」一筆談と唱和を中心に『新井白石の現代的考察』/宮崎道生編/東京:吉川弘文館, 1985。
 - 33) 阿比留西山順泰(1660~1688) 江戸前期の儒学者、対馬藩(長崎県)藩士。もと阿比留氏、のち西山氏に改める。字健甫、通称健助、西健甫ともいう。父順益は医者として対馬藩に仕え、順泰もはじめ医術を学ぶがそれに満足せず、経史の学を好み、18, 9歳にしてその学力は藩主に聞こえ、藩主は彼を医師から祐筆に改めさせた。28歳のとき藩主宗義真の許可を得て江戸に上り、木下順庵について学ぶ。僻遠の地のため就学の遅れたことを悔やみ刻苦精励、学業大いにあがるという。新井白石とも親しく、白石の順庵への入門には順泰のなかだちがあったと白石は回想している(『折たく柴の記』)。32歳で早世し、下谷養玉寺に葬る。木下順庵は大いに惜しみ碑銘を製した。
 - 34) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 113-4ページ。
 - 35) 李元植「新井白石と朝鮮通信使」一「白石詩草」の序文を中心に『日本思想史』/ペリカン社/46号, 1995, 23ページ。原文漢文, 李元植による和文訳。
 - 36) 足立栗園『新井白石』/偉人史叢シリーズ/1897。
 - 37) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 139ページ。
 - 38) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 96ページ。
 - 39) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 139ページ。
 - 40) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 139ページ。
 - 41) 宮崎道生『折たく柴の記釈義』東京:近藤出版社, 1985, 117ページ。
 - 42) 『新井白石全集』第6巻/新井白石著;今泉定介編輯・校訂/吉川半七, 1907, 原文漢文, 638ページ。
 - 43) 『奥羽海運記』その主な要点は次の通りである。東北地方は土地も広くても人は少ない。但し、米は多いからこれを安く売ってしまう。これに対して上方(西南諸国)は人が多く土地は狭く、都市や城邑が連なっているから、食料が不足勝ちで買入れなければならない。運輸の道(奥羽海運)が出来ると、有る無しの助け合う事も出来る。従って、国家の利益としてはこれ以上の事は無い。奥羽の海運が江戸と大坂に結ば

れて、ひとり江戸と大坂との交易だけでなく、東北日本と西南日本が通じ相互に助け合う道が開けて来たのであるという内容である。

- 44) 宮崎道生『新井白石』/東京/吉川弘文館, 1989。
- 45) 宮崎道生『折たく柴の記積義』東京: 近藤出版社, 1985, 140ページ。
- 46) 宮崎道生『折たく柴の記積義』東京: 近藤出版社, 1985, 144ページ。
- 47) 宮崎道生『折たく柴の記積義』東京: 近藤出版社, 1985, 144ページ。
- 48) 宮崎道生『折たく柴の記積義』東京: 近藤出版社, 1985, 149ページ。
- 49) 尋常小学修身書/巻5 児童用/文部省著/復刻/東京: 大空社, 1990. 6。
- 50) 宮崎道生『折たく柴の記積義』東京: 近藤出版社, 1985, 152-3ページ。
- 51) 宮崎道生『折たく柴の記積義』東京: 近藤出版社, 1985, 153ページ。
- 52) 『新井白石日記』/新井白石[著]/東京: 岩波書店, 1953-54。上巻6ページ。
- 53) 『西洋紀聞』新井白石[著]; 宮崎道生[校注]/東京: 平凡社, 1968。
- 54) 羽仁五郎『新井白石の合理主義』著/『思想の科学』/思想の科学社/1967, 6ページ。
- 55) 宮崎道生『折たく柴の記積義』東京: 近藤出版社, 1985, 309ページ。

参考文献

- Joyce Ackroyd 著『Told round a brushwood fire』/University of Tokyo press
- Joyce Ackroyd 『Lessons from History: Arai Hakuseki's Tokushi Yoron』Brisbane, Australia/University of Queensland Press, 1982.
- Kate Wildman Nakai 『Shogunal Politics: Arai Hakuseki and the Premises of Tokugawa Rule』/(Harvard East Asian Monographs)/1988
- 荒川久寿男『新井白石の学問思想の研究: 特に晩年を中心として』
伊勢: 皇学館大学出版部, 1987. 3
- 池田越子『ローマへ伝えられたシドッチ日本入国後の風聞』/『日本歴史』日本歴史学会, 1950. 11
- 井上厚史『新井白石の朝鮮観』『環』藤原書店/23号/2005
今泉定介編輯・校訂『新井白石全集』/新井白石著/吉川半七, 1905 ~ 7
- 大川真『新井白石の国家構想』『日本思想史学』/34号/2002
- 勝田勝年『新井白石の歴史学』/東京/厚生閣, 1939
勝田勝年『新井白石の学問と思想』/東京/雄山閣, 1973. 11

- カンパナ・マウリツィオ『西洋紀聞』と『南北倭志』—新井白石の世界地理学研究とその性格—/関西大学/2005
カンパナ・マウリツィオ『西洋紀聞』—シドティとの奇会によって飛躍した新井白石の洋学とその性格—/『史泉』関西大学史学・地理学会107号/2008
- 栗田元次『新井白石の文治政治』/東京: 石崎書店, 1952. 12
- 桑原武夫訳『折たく柴の記』/新井白石著/東京: 中央公論社, 2004
- 桑原武夫『新井白石』/中央公論社, 1995
- 桑原武夫責任編集『新井白石』/東京: 中央公論社, 1983. 12
- ケイト・ワイルドマン・ナカイ「徳川朝幕関係の再編」/『日本思想史学』27号/1995
- ケイト・W. ナカイ著; 平石直昭, 小島康敬, 黒住真訳『新井白石の政治戦略: 儒学と史論』/東京: 東京大学出版会, 2001. 8
- 古藤友子「新井白石と朱舜水」/『古田敏一教授頌寿記念中国学論集』汲古書店/1997
- 相良亨[ほか]編『江戸の思想家たち』/東京: 研究社出版, 1979. 11
- 中川久定「新井白石によるキリスト教の紹介と反駁」著/『思想』岩波書店 1991. 1
- 長興善郎『切支丹屋敷』東京: 大日本雄弁会講談社, 1962. 11. 5
- 日本歴史地理学会編『江戸時代史論』/東京: 日本図書センター, 1976
- 長谷川鉦平「白石とシドチ」/『日本歴史』日本歴史学会, 1950. 11
- 羽仁五郎注『折たく柴の記』/新井白石著/東京: 岩波書店, 1939
- 羽仁五郎「新井白石の合理主義」『思想の科学』/思想の科学社/1967. 8
- 羽仁五郎『白石・論吉』/岩波書店, 1937
- 原了円『佐久間象山』/東京: PHP 研究所, 1990
- 前田勉「蘭学者の国際社会イメージ」『愛知教育大学研究報告』54号/2005. 3
- 松村明・尾藤正英・加藤周一『新井白石』日本思想大系/新井白石[著]/東京: 岩波書店, 1975
- 松村明『新井白石と外国語・外来語の片仮名表記』『松村明教授還暦記念国語学と国語史』/1977. 11
- 松村明校注『折たく柴の記』/新井白石著/東京: 岩波書店, 1999
- 宮崎道生[校注]新訂『西洋紀聞』新井白石[著]/東京: 平凡社, 1968
- 宮崎道生『新井白石の史学と地理学』/吉川弘文館, 1988
- 宮崎道生『新井白石の洋学と海外知識』/吉川弘文館, 1973
- 宮崎道生著一増訂版『新井白石の研究』/吉川弘文館, 1984
- 宮崎道生『新井白石断想』/近藤出版社, 1987

宮崎道生『新井白石の人物と政治』/吉川引文館, 1977

宮崎道生編『新井白石の現代的考察』/東京:吉川弘文館, 1985

宮崎通生『折たく柴の記釈義』/東京:近藤出版社, 1985

宮崎道生「新井白石と蘭学」/『日本歴史』日本歴史学会, 1967. 1

宮崎道生「新井白石と海外知識」/『歴史教育』歴史教育研究会, 1969. 6

宮崎道生「采覧異言の流布と史的役割」/『日本歴史』吉川弘

文館 284号/1972. 01

若尾政希『「太平記読み」の時代』—近世政治思想史の構想—/平凡社

マリオ・トルチヴィア著;北代美和子,筒井砂訳,高祖敏明監修『ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティ 使命に殉じた禁教下最後の宣教師』キリシタン文化研究 第29冊/東京:教文館, 2019

(2019年7月29日掲載決定)